その十七　シャボン玉

「俺の事、守(モリ)から聞いたんか？」
「ううん」
俺は「ウン」という返事しか想定していなかった。俺と美英子を引っ付けるために守(モリ)が何らかの手を打ったと確信していたけれど……違うと言われれば質問が続かない。
「ウチ、ずーっと前から知ってたん」
このセリフは何度か聞いた。言い出しにくい話なのか「知ってたん」の続きを聞いたことがない。でも、もう我慢しなくても良くなったのか……美英子が続ける。
「大学のことや住んでるとこ、教えて貰ったけど……そんなん、どうでもエエん」
美英子は一旦言葉を切ってからついに告白する。
「コンサート……神戸の……随分昔の事やけど……あのとき、ウチ、楽屋のトイレで聞いたん。二人の会話を。ずーと聞いてた。夏子さんが守(モリ)君との婚約をマモルに説明する段取りを話し合ってたん……」
――春夜(ハルヨ)じゃなく、美英子だったんだ！
「……摩周湖で失敗したのに同じやり方を押しつける守(モリ)君に夏子さんはかなり抵抗したんやけ

ど押し切られた……」
「摩周湖！　あれか！　えーと『シャッター、押してくれ』って夏子が近づいて……」
――やっぱり、あの時には守（モリ）と夏子は付き合っていた！
「でも、また失敗した……話、進めてもかまへん？　やめてもエエけど」
大きく頷いてみせる。
「ウチは興味津々（シンシン）。何度、ノックされても出られへんし、音、立てたらあかんと思うてしゃがんだまま。水も流されへん。しんどかった」
コンサート会場の受付にいた美英子の態度は確かにおかしかった。あれからもう二年半以上経った。その間美英子はどんな気持ちで俺を見つめてきたのか。京都のデートが一つの答えだった？　あのデートからも二年近く経っている。
すべてではないがほぼ疑問は消滅した。と言うより美英子が消してくれた。急に愛（イト）おしさが込み上げるがうまく言葉にできない。
――いつもの調子でいいか
「そうやったんか……どれぐらいの間、聞いてたんや」
「？」
「トイレで聞いてた時間や」
「五、六分……もっと長かったかも」

思わず笑ってしまう。
「あきれたん？」
「いや……」
「何がおかしいん？」
「だって、パンツ下ろしたまま聞いてたんやろ？」
「イヤやわ」
美英子は苦笑いながら小膝を抱えてうつむく。
「変な想像せんといて。恥ずかしい」
折っていたジーンズを一段伸ばすと視線を戻す。
「ねえ……六甲駅に、なんで来てくれへんかったん？　手紙、出したんやけど」
「行ったで！　一時間も待ったんやで」
「えっ！　ほんまに？　ウチ、四時ごろからズーッと待ってた……」
今度は視線を外さずにはにかむ。
「……一回だけトイレに行ったけど」
向かいのホームで待ってたとは言えずに美英子を見つめる。
「髪の毛！」
頷く美英子。

「前の日に切ったん。ウチ、怖かった」
「そう言えばおかっぱ頭の女の子がいた」
「おかっぱ？　違う！　ビートルズと同じマッシュルームカットや」
急に怒りだす。
「ビートルズ、好きなんか？」
「うん。大好き」
「俺もや」
「ほんまに？」
「サージェント・ペパーズって、知ってるか？」
「知らんがったらモグリや」
「ビートルズで一番好きなアルバムなんや」
「ウチも！」
美英子から怒りは完全に消える。
「ウチ、最後の曲が一番好き！」
「A・DAY・IN・THE・LIFEや」
「そや！」
「『A・DAY』って、ひょっとして、今日の事かも！」

「そや！　絶対そうや！」
感極まる。
「次の日も待ってたんか？」
「うん」
「その次の日も？」
「うん」
「三日間もか……ごめんな。俺、最初の日だけやった」
俺の感動は最高潮に達する。もちろん美英子も！
「来てくれてた……来てくれてたんや！」
美英子は歓喜の涙を流しながらズルッと鼻水を吸うと苦笑いする。
「ごめんね。ウチってブスやし色気もあれへん。せやからおかっぱに見えるんや」
もう一度鼻水を吸い上げると抱きついてきた。
「ありがと。本当にありがとう。マモルは命の恩人や」
俺は抱きしめるだけで何も言えない。
「やっと、やっと、お礼、受け取ってもらえた。うれ（しい）……」
美英子の言葉を遮って強引に唇を重ねる。その瞬間全身に電気ショックが走る。美英子も震え出す。このまま死んでもいいと思うぐらいの感動の痙攣（ケイレン）に包み込まれる。

あの頃、あの時、俺の心の中で美英子にしっぺ返し的な気持ちがあった。愛情と表裏をなす憎しみが混入していた。俺は愛情に確信を持てなかったし、それまでのすべてを断ち切って一人になりたかった。

「毎日、電話、待つだけ。あれだけ電話くれたのに。出掛けたとき、帰ったら真っ先にお母さんに確かめた。けどなかった。会いたかった。それまでのウチは……恩知らずやった」

胸の中で鼻声を続ける。

「お礼だけはと思って手紙出したけど……来てくれへんと……」

確かに会いに行くもんかと思った。でも、淋しかった。でも、癒やしてくれるとはこれっぽっちも思わなかった。一方で通学の降車駅だからと期待した。

「髪の毛、切って行ったら、来てくれへんがっても……」

またズルッと音を立てる。

「……でも来てくれてたんや。こんな、うれしい事あらへん」

＊

俺たちは海上をゆっくり動く多数の光と六甲山中で点在する光の間にいる。神戸の夜景は何処から眺めても美しい。ましてや風の強い今夜は浮き出たように迫ってくる。

逃避的に愛される事から逃避した美英子。対象は俺であり、俺のそれは夏子。そしてその狭間に守（モリ）がいた。美英子にとって「怖かった」のは、守（モリ）が俺と付き合ったまま夏子と結婚すると

いう事態。それでも美英子は細く長く踏ん張り続けた。一方、俺はすべて破棄した。
そう！　今日までデートしたのは一回だけ。そのデートを除けば会ったのも三回。でも心と心は絶えず絡み合ったのに接点を持つことはなかった。でも今日、しっかりとした接点を共有した。
風の中で美英子の吐息は時を刻み、触れる頬は熱く火照る。いつかこんな雰囲気を味わった事が……知床だった。テントの中で……
「三年前……」
海から俺に視線を移す美英子。あのテントの中で聞いたのと同じうわついた声を出す。
「三年前の今日……ウチ、抱かれたん。黒馬で一緒に飛び込んでくれたんも去年の今日……」
一度ならず、二度ならず……今日も含めれば……
「……三回も偶然があったんか」
すべての時計をかき集めて時間調整して美英子はやってきた。その時計の針が回り始めた時刻を尋ねる。
「夏子のこと、いつ知った？」
「マモルと出会うほんの、ほんの少し前」
「えっ！」
「観光路線バスで一緒やったん」

「そうやったんや……もう、どうでもいいことやなあ」
美英子は安心しきったように涙を流す。涙を拭いてやろうと尻のポケットからピンクのハンカチを取り出す。
「えー！」
急に美英子が叫ぶ。
「まだ、持ってたん！」
ハンカチを見て美英子は大笑いしながら身を寄せてくる。俺は苦笑いしながら指を三本立てる。
「『A・DAY』やなくて『THREE・DAY』やなあ」
「ううん。『THREE・DAYS』や」

＊

人の一生、偶然か必然かはわからない。偶然なら因果を求め、必然なら逃避する。それで決着する。
「時」そのものは存在しない。不死身なら「時」は不要。永遠を乞う有限の身だから「時」が存在する。だから「時」に縛られ「時」から逃れる事ができない。
「時が解決する」とは「時を忘れる」こと。逃避だ。いや、逃避ではない。
「時」を忘れるほどの瞬間を手に入れれば、「今」を充実できる。瞬間的な完全燃焼をすれば、

つまり止めどもなく続ければあっという間に「時」が流れ、すべてが燃え尽きる。「時」を忘れる瞬間を持てば「今」が永遠になる。

有限の身だから「時」の流れを見つめなければならない。でも瞬間、瞬間を燃え尽きるように生きていけば……

……それでも「時」は流れるだけ。ただそれだけの事。

＊

黄昏（タソガレ）が訪れる。しかし、高度か成長を続ける日本経済の象徴である臨海工場群の照明が暗闇を押し返えすから、お互いの顔がよく見える。抱き疲れて身体を離すと美英子が微笑む。

「黄昏（タソガレ）の意味、知ってる？」

「夕焼けの後の……うーん、分かれへん。教えて」

「教えたげる。キレイな夕焼けの後、暗くなったら顔、見えなくなるやんか。『誰そ彼（タカレ）』って言うのが語源なんやて」

『誰なんや？　アンタ』と言う事か」

「うん。でもウチにはマモルって、すぐ分かる」

最高の気分になる。

――「アホや、アホや」と言うけど、どの辺がアホやねん！　俺の方がアホや

「じゃあ、行こか」

美英子が悪戯っぽく笑う。
「どこへ？」
「そこまで考えへんがった。俺ってアホやな」
いつの間にか波が強くなってきた。満ち潮？　大潮？　高潮？……時々結構大きなしぶきが上がる。とりあえず美英子の手を取って一段上る。
テトラポッドで波打ち際がよく見えない。その方がいい。なぜならプラスティック製の容器やゴミがひしめき合う海など見たくもない。急に思いもよらない高くて強い波がテトラポッドを超えてくる。
「バッシャーン」
次の瞬間、周りが大小様々なシャボン玉だらけになる。
「わあ！」
洗剤が入った大量のボトルが裂けたのか、無数のシャボン玉が工場群からの光を受けて美しく輝く。言葉にならない幻想的な世界が広がる。様々な色のシャボン玉がまとわりつく。近くを船が通ったのか、次々と迫る波を受けてはじけてもはじけても生まれる。
「すごい！」
「夢の国にいるみたい！」
しばらくシャボン玉に見とれる。やがて波が弱くなるとあれだけあったシャボン玉が音も立

てずにすべて消える。
「きれかったな」
「一緒で良かった……」
再び大きな波が打ち寄せる。シャボン玉が生まれるどころか……
「わあー！」
「キャア！」
慌てて階段を駆け上がるが間に合わない。頭から波を被った。海水ではない。汚水だ。
「臭（クサ）い！」

＊

夏だからいいが、ずぶ濡れのまま車に戻る。俺が運転席に座る。
「ええ雰囲気やったのにぶち壊しや」
座席の下からサンダルを取り出す。車内に異臭が充満する。窓を全開してから美英子がサンダルを履く。
「変なモンが一杯海に流れ込んでる。イヤやわ」
「公害や！」
「ほんまや。あっ、せや。忘れてた」
上半身をねじって後部座席から紙袋を取り出す。

「これ『ありがとう』の付録」
紙袋からきちんと畳まれた茶色のカーディガンを出す。
「松本駅で貸してくれた……忘れんと持って帰ってね。せやけど臭(クサ)い」
美英子は鼻を摘まむ。
「あのとき『化粧ケース忘れてへんか』って言ったやん。覚えてる？」
「ああ。半分イヤミやったなあ」
「気にしてへん。でも気付いたん。あのとき、もっと大きなモン忘れるとこやったん」
「もっと大きなモン？」
「このカーディガン……」
涙を使い果たしたのか、うっとりとした目でみつめる。
「マモルの気持ち、忘れんように、涼しくなったら毎日このカーディガン着てたん」
臭くても抱かずにはいられない。乱暴にキスする。何回ケイレンしても心地いい。美英子が耳元で囁く。
「ウチら、どんな夫婦になるんやろ……ね」